

ENEOS スーパー耐久シリーズ2025 Empowered by BRIDGESTONE

第1戦 もてぎスーパー耐久 4Hours Race

MOBILITY RESORT MOTEGI 

MOBILITY RESORT MOTEGI 

apr

Racing Constructor

apr

Racing Constructor

ENEOS スーパー耐久シリーズ2025 Empowered by BRIDGESTONE

第1戦 もてぎスーパー耐久 4Hours Race

開催地：モビリティリゾートもてぎ（栃木県）／4.801km

3月23日（予選/決勝）

天候：晴れ コースコンディション：ドライ 観客数：6,700人

新体制の初戦で3位表彰台を獲得！ 最後まで諦めぬ執念が実を結ぶ

2025年、全7戦で争われるスーパー耐久シリーズに、aprは引き続きFIA-GT3によって争われるST-Xクラスに臨む。6シーズン目となる「DENSO LEXUS RC F GT3」をドライブするのは永井宏明選手と嵯峨宏紀選手に、一昨年から昨年とシリーズを連覇した蒲生尚弥選手、今季はスーパーフォーミュラライツ、そして昨年は永井選手とともにSUPER GT もドライブした、19歳の小林利徠斗選手を加えた新体制となった。

昨年は全7戦中6回の表彰台を獲得し、第5戦・鈴鹿で優勝。しかしシリーズは4位に。今年は1勝に留まらず、そして王座獲得を最大の目標としていく。開幕戦はモビリティリゾートもてぎで、「もてぎスーパー耐久 4Hours Race」として開催。2グループ開催で4時間の戦いながら、予選・決勝が1日で実施される。ST-Xクラスが属するグループは、23日にRace2として開催された。開幕戦Race2のST-Xクラスのエントリーは全5台で、ライバルとなるのはポルシェ、メルセデス、アウディ、アストンマーティンの外国車4台。Race2はST-Z、ST-Q、ST-1、ST-2、ST-3、ST-4クラスとの混走で、合計40台の車両がそれぞれのクラスで優勝争いを繰り広げることとなる。

公式予選 3月23日(土)8:30～

特別スポーツ走行が木曜日に、STELによる専有走行が金曜日に行われ、土曜にはRace2のフリー走行が10時15分から45分間実施された。このセッションでは永井選手がまずコースインし、セッティングを確認しつつピットイン。再びコースインして12周目に1分54秒012のベストタイムをマークして再びピットへ。ここで蒲生選手に交代して17周目に1分53秒827と、全体で3番目のタイムを出して終了となった。

公式予選は日曜朝の8時50分に15分間のセッションが始まった。気温は前日より暖かい16度で、路面温度も23度だったが、直後に2コーナー先でクラッシュを喫した車両があり、その回収のためにセッションは7分間中断し、8時58分に再開された。Aドライバーの永井選手は2周かけてタイヤを温めると、3周目に1分53秒603のタイムをマークし、さらにアタックを続けたが1分53秒614とわずかにタイムアップはならなかったものの、2番手につけることとなった。

Bドライバー予選は予定より5分遅れの10時45分から15分間で行われ、蒲生選手がコースイン。3周かけてタイヤを温めると最後の4周目に1分51秒416をマークし、3番手につけた。永井選手と蒲生選手のタイム合算は3分45秒019となり、トップの車両とはわずかにコンマ306秒の差で2番手となった。しかしグリッドはフロントローを確保し、決勝レースに向けて期待が高まった。

C・Dドライバー予選では小林選手と嵯峨選手がコースイン。小林選手は1分54秒902、嵯峨選手は1分56秒106と難なく基準タイムをクリアした。





永井宏明選手

予選はかなり気合を入れ走ったので、2番手という結果は良かったんじゃないのかなと思います。今年からチームに合流した蒲生くんも頑張ってくれました。決勝はみんなで頑張っつないで、表彰台を目指したいと思います。



蒲生尚弥選手

低速コーナーの多いもてぎはRC FIにとっては苦手なのですが、フロントローが獲れましたので、幸先の良いスタートが切れたのではないかと思います。決勝のペースはライバル勢が速いと思うのですが、4時間レースをミスなくやって、ポイントをひとつでも多く稼いで今後につなげたいと思います。



小林利徠斗選手

タイムというより決勝に向けた準備でした。決勝に向けてある程度感触もつかめましたし、安定したペースで走れそうな方向も見つかっているの、決勝ではしっかりゴールまでクルマを運びきれるように、そこを意識して頑張りたいと思います。



嗟峨宏紀選手

決勝に向けたシミュレーションのような予選だったので、ニュータイヤや少ない燃料でのアタックではありませんでしたが、概ね悪くはないかなと思います。ポルシェとAUDIの速さにはかなわないかもしれませんが、うまい戦略で表彰台に立ちたいと思っています。頑張ります。

金曾裕人監督

獲れるはずはないと思っていたフロントローが獲れたのは永井選手、蒲生選手のパフォーマンスのおかげでした。しかしレースはそんなに甘くはありません。このもてぎはRC FIにとっては、得意の空力も使い切れないので、かなり苦手なコースだし、ポルシェにいちばん合っているコースなので、決勝は厳しくなるのは理解済みです。そんな状況なのでレースプランに沿ってミスなく最後まで走り表彰台の一角は狙いたいと思います。

決勝レース 3月23日(日)12:30～

金曜まで寒の戻りで冷えたもてぎだったが、その寒さも土曜朝までで、日曜のRace2がスタートする12時30分には気温は23度、路面温度は32度と汗をかく程度まで上昇した。この4時間レースは3回の給油を伴ったピットインが義務づけられている。またADライバーは25%、つまり60分間の走行が必要となる。決勝のスタートドライバーを務めるのは永井選手。ST-XクラスでADライバーがスタートを務めるのは、他に後方スタートの1台だけだ。12時34分、シグナルがグリーンに変わり国旗が振られる中、4時間の決勝レースがスタート。永井選手は2番手を守ってオープニングラップを戻ってきた。

次の周にはプロドライバーとのバトルを避けて先行させる。また6周目には若手ドライバーの車両に先行を許すも、クラス4番手を守り、1分58～59秒台のタイムを安定して重ね、20周目には3番手を奪回した。義務周回時間の60分をクリアした、31周目にピットに戻って嵯峨選手にタイヤ無交換で交代する。

嵯峨選手は4番手でコースに戻り、ポジションをキープし続ける。そして約30分、14周という短いステントを終えてピットインし、蒲生選手に交代。蒲生選手と小林選手のふたりで、残り2時間半を戦うこととなった。蒲生選手は1分56秒台でコンスタントに周回を重ね、3番手のジェントルマンドライバーが操る車両との差をじわじわと詰めていく。スタートから2時間が近づいた14時26分に2コーナー先で1台の車両がストップしたことで、車両を回収するためにFCY(フルコースイエロー)となり、蒲生選手の追い上げもいったん水が入ったが、2分後にFCYが解除されると、再び追い上げを開始！ 30秒以上あった差を一気に縮め、71周目のオーバーテイクで3番手に順位を上げた。

83周目に蒲生選手が4番手に35秒ほどの差をつけピットイン。アンカーの小林選手が、残り1時間15分を担当する。小林選手は4番手でコースに戻ると、2周後には3番手の車両がピットインしたことでひとつポジションアップ。一方、4番手で続く車両はタイヤを交換せずにピットでの滞在時間を短縮し、この時点で2台の差は13秒ほどに縮まっていた。

小林選手は1分56～57秒台のラップタイムで周回を重ねたが、残り10周となったあたりで4番手の車両が背後に迫ってきた。小林選手は時折1分55秒台にタイムを上げて逃げ切ろうとするも、バックマーカーに詰まった115周目の5コーナーの先で並ばれ、130RからS字にかけてミッドシップ車両AUDIのトラクションの掛かりの良さには抗えず、逆転を許した。それでも小林選手は諦めることなく表彰台を目指し前の車両を追った。

16時34分、トップの車両が121周でチェッカーを受けてレースは終了。しかしファイナルラップで2秒先に行く3番手のAUDIがガス欠となりコース上でストップ。その脇を小林選手がすり抜けて3位でチェッカー。土壇場で表彰台を獲得することができた。

第2戦はゴールデンウィーク直前の4月26～27日に、鈴鹿サーキットで5時間レースとして開催される予定。「DENSO LEXUS RC F GT3」の得意とする鈴鹿で優勝を目指すこととなる。





永井宏明選手

3位に入れました。僕は全然ペースが上げられなかったのが厳しかったのですが、プロのみんながすごく頑張ってくれたので、最後の最後でポディウムに上れることになりました。次は自分にとってホームコースですし、クルマ的にもチャンスがあると思いますので、しっかり頑張って連続で表彰台を目指したいと思います。



蒲生尚弥選手

本当にベストなレースだったと思うので、とても良い結果だったと思います。ピット作業のミスや、僕自身もピットでエンストしてしまったりとか、そんなミスがあったので、そういう中でもちゃんとポイントを獲得したので、これがシーズンに効いてくると思います。次の鈴鹿はクルマ的には得意だと思っています。僕は次のレースは他のレースに出るので参加できないのですが、皆さんに頑張ってもらいたいと思います。



小林利徠斗選手

表彰台に立てて良かったです。自力で3位を狙えるようにやることはやろうと思いましたが、結果的に守れなかったのが、そこは悔しいです。クルマの挙動もそうですが、他のクラス車両がいるところの接近戦など、まだ未熟なところもありますから、結果としてはうれしい3位ですが、結果的に3位を實力で獲れてなかったという内容なので、今後に向けて改善していこうと思います。



嵯峨宏紀選手

てっきり4位だと思っていましたが、(3番手の車両が)止まっちゃってました。でもその位置にいたから得られた結果ですし、苦手なもので3位という結果は良かったと思います。こういう貴重な得点が最終戦で明暗を分けることになると思うので、頂きものですが、その次につながるレースができるように頑張っていきたいと思います。

金曾裕人監督

最後にひとつ順位は上がりましたが、ピット作業でホイールナットを転がすミス、スタート時もエンストしたりして2回のPITで13秒ぐらいロスしたので、これがいちばん僕らにとっては戦い方が劣勢になった背景。新たな布陣であり、まだ全部が噛み合っていないというのが一番の問題です。全て噛み合わないで優勝は出来ない厳しい世界なので、次戦までに改善します。永井選手のタイヤ内圧を合わせ切れず苦戦させてしまったが、しっかり仕事をこなし、蒲生選手も小林選手も素晴らしくペースも良く、この2人はRCFでのレースが初めてにしてはさすがだと思いました。今年は、もっと上に行ける気配満載の開幕戦でした。次戦もご期待ください。